令和3年度「未来を創る学力向上支援事業」に係る未来を創る授業力向上協議会（国語）

【目的】各中学校（義務教育学校後期課程を含む。以下同じ。）の国語科代表の教員等を対象に、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくり及び授業改善に関する講義・説明等を行うことにより、国語科教員の指導力向上を図り、もって生徒の学力向上に資する。

【主催】大分県教育委員会

【期日】令和３年１０月５日（火）１３：３０～１６：２０

【会場】大分県教育センター　講堂

Ⅰ　開会行事

大分県教育委員会挨拶　　大分県教育庁義務教育課　山川　明宏　指導主事兼課長補佐

【要旨】

〇新型コロナウイルス感染症の完全な収束が見えない状況の中、子どもたちの学びの保障に日々ご尽力いただいている。

〇今年度より中学校では、新学習指導要領の全面実施となり、学習評価が４観点から３観点になったことを踏まえ、それに対応した評価を各学校でも行っていただいている。

〇学習指導要領に示された趣旨の実現に向け、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善や個別最適な学びと協働的な学びを充実するために、１人１台端末の活用を推進していくことも求められている。筆記用具のように日常的に使われる道具の１つとして効果的な研究を進めていただきたい。

Ⅱ　行政説明及び協議　「大分県の中学校国語科の課題と授業改善」

＜説明者＞大分県教育庁義務教育課指導主事　瀧口忍　指導主事

【要旨】

１．学力調査の結果から見える課題

〇大分県学力定着状況調査について、全ての領域において、全国正答率及び目標値を上回っている。
日頃の授業で力をつけて下さっている成果と捉えている。

〇全国学力・学習状況調査について、全ての領域において、全国平均を上回る結果となった。
ただし、「伝えたい事柄が相手に効果的に伝わるように書く」問題の無回答率 10.8％で全国平均を下回っている。

〇学力調査の目的の再確認
生徒の学力や学習状況を把握・分析し、成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てる。調査問題や調査結果を活用して、指導を充実させたり、生徒の学習状況を改善することが求められている。

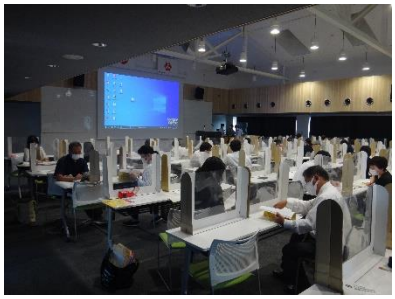
○「全国学力・学習状況調査の報告書」を用いて授業改善に役立てていただきたい。
特に、「２（１）調査問題の内容、課題等、指導改善のポイント」、
「３（２）中学校国語　1※各問題についての分析」

■特に課題が見られた２つの問題について
①３四：(文章に表れているものの見方や考え方を捉え、自分の考えをもつ問題)
正答率は全国値を上回ったものの、相対的に見ると、正答率が低く無解答率が高い。
→問題文を確実に読み取れるようになることが重要。その上で、解答類型から必要な学習活動を考えていく。
②４四：(伝えたい事柄が相手に効果的に伝わるように書く問題)
正答率・無解答率ともに、全国値を下回った問題。
→目的や意図に応じて読み手に分かりやすく伝えるように書くことを意識させることが大切。
４つのポイント　①根拠を明確にする（1年）、　**②説明や具体例を加える（2年）**、
③表現の仕方を工夫する（3年）、④資料を適切に引用する（3年）
に加え、敬語の働きについても理解させ、話や文章の中で使うこと（2年）

○これからの授業について
学習指導要領が全面実施になり、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、生徒に確実に資質・能力を身に付けさせていくため、**「具体的な評価規準を生徒と共有する」**ことも重要。

○分析に基づいた指導改善のポイント
ステップ１⇒**「単元で取り上げる指導事項の確認」**
ステップ２⇒**「単元の目標と言語活動の設定」**を確実に行う　＋**素材研究・指導法研究**も重要である。

２．グループ協議　　〔読むこと〕の授業を考える
○学力調査において明らかとなった課題を改善する授業作り（第２学年）について
題材として、問題データベースの中にある問題を用いて、前後のペアで協議。



＜補充的に力を付けるための参考として＞
○問題データベースの問題を授業や評価問題として活用。
○読売新聞の教育ネットワーク(登録必要)、大分合同新聞のＮＩＥ活用。

Ⅲ．講　義　「これからの国語科の指導と評価」

＜講　師＞　国立教育政策研究所教育課程調査官・学力調査官

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　杉本　直美　氏

【要旨】

①　新学習指導要領全面実施における学習評価　　②これからの国語科の授業づくりのポイント

○「主体的に学習に取り組む態度」は挙手の回数や発言の回数だけではない。

「粘り強さ」と「自らの学習を調整しようとする側面（自己調整）」の２つの側面を評価。

→そのためには「言語活動」の設定が不可欠。生徒が自らの学習を調整しようとする場面が生まれる。自己調整は、新しい言葉ではなく、これまでも、生徒が試行錯誤する場面を作ってきていたが、十分ではなかったので、改めて見直して欲しい。

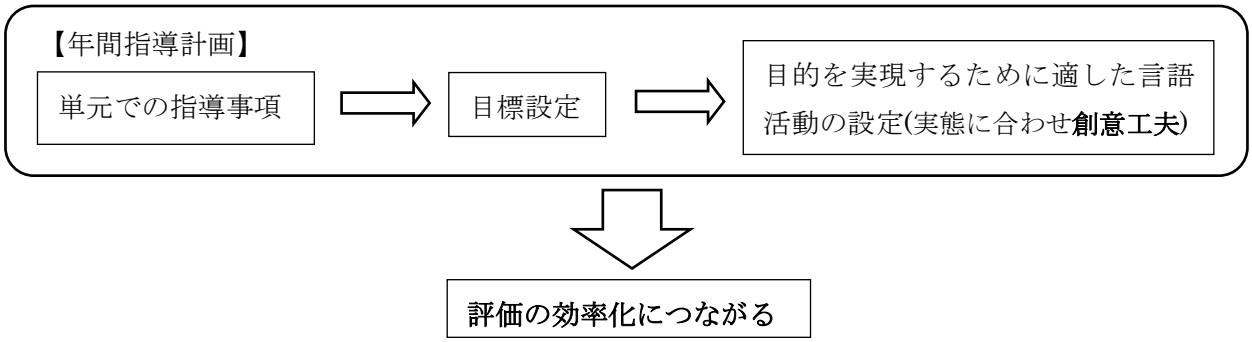
（「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」p.38、39 参照）

○評価の観点が５→３になったことで、抽象度が増した。

○思考・判断・表現を意識することで、生徒に確実に力が付いてきているのは先生方のおかげ。

ただし、思考・判断・表現は言語活動を評価するのではない。

○『単元のどの指導事項を使うか』と『単元の目標』、『どのような言語活動にするか』をセットで考えていく。



※「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」p.38 の STEP１～５

STEP2　言語活動を通して、指導事項（資質・能力）を指導する。

言語活動のメリット･･･思考・判断・表現の場面が生まれる。主体的な学びにつながる。

※虫食い等の型が決まったワークシートでは、本人の試行錯誤する場面や主体的な姿が生まれない。

STEP3　単元の評価規準の設定　指導事項をそのまま書く。そうしなければ、ブレが生じる。

１時間ごとの評価規準は、実態に応じて教師が設定。

◎設定した「単元の評価規準」について、実際の学習活動に照らして、「B と判断する状況」を具体的に想定することが極めて重要。

Ｂ評価は、基準をたてるが、**A評価は、【キーワード】**で見取るのも１つの方法。

○ワークシートは、評価できるものでなければならない。（B を見取る）

〔提案〕ワークシートでは B 評価までを見て、A 評価は小テストで見る。

〔提案〕まとめは確認すべきポイントの具体を示し、振り返りは必ずしもしなくてよいが、教師が知りたいことを記述させるのがよい。

○言語活動は準備に時間をかけずに、まずやってみること。